

学び支援の自己理解教育実践「大学生の心理学」を 居場所及びアイデンティティの視点から捉える

小 沢 一 仁

(東京工芸大学工学部基礎教育研究センター)

“Place” and “Identity” in learning support project “Psychology of College Students”

Kazuhito Ozawa

(General Education and Research Center, Faculty of Engineering, Tokyo Institute of Polytechnics)

Summary

The purpose of this study was to consider “Place” and “Identity” in college students analysing students' reports as data. As to “Place” students wrote in their reports that 1) they worried what to do in college and what to do in the future, 2) they felt conflicts between with expectations from their parents and their own expectations. As to “Identity” two cases were taken up. One case presented no communication with the others and an escape from their own identity. The other case presented communicating and discussing on conflict ideas of others to find their own identity. It was discussed the difference between students who pursued their own identity and who wanted to be free from their own identity.

1. 何のための大学の授業か？ 単位のだけのためから、自己理解のためへ

本論で検討する、「大学生の心理学」実践授業は、学生の自己理解と学びの支援を目指すものである。この授業の詳細な内容については、水間玲子(2002)「学び支援プロジェクト——大学生生活編——『大学生の心理学』における学生の参加動機について」を参照されたい。ここでは、アウトラインのみを示す。はじめの2回にわたるガイダンスの後、学生自身がテーマを設定する。そして、学生同士がグループとなり、自分のテーマを発表し、ディスカッションを行う。そこで、教師から伝達されるものの重要なものは、ディスカッションのルールに関するものである。その後、最終レポートを作成し、互選された発表者4名が行う発表会をもってこの授業は終了した。さらに、参加者の学生は終了後の面接を受けた。本論は、学生が書いた最終レポートを主たる資料として、そこに現れた自己理解の姿を、居場所とアイデンティティの視点から述べようとするものである。

(1) 単位のための授業観

学生が大学の授業に期待するものは何か。何のために授業に出ているか。具体的な科目によって違う可能性がある。専門的な知識であり、教養的な知識であろう、しかし、溝上(2002)は、「学生の経験世界から大学授業を考える——大学教育の質的向上を目指して——」において、大学の授業に対して、極端な期待としては、単位だけくれればそれでいいという学生が実態としていることを提示している。

このような、大学の授業に期待するのは、卒業のための単位だけで後は何も期待しない、できれば最小の労力で単位がもらえることを期待する、という学生の思いは、少なからずどの学生の心の中にこのような気持ちがあるのではないかと考えられる。この最悪の実態から、大学の授業を考え直す必要がある。

大学の授業のいくつかは、学生にとっては、効率よく単位を稼ぐだけの場と受け取られている。このように書く、

筆者の授業においても、何とか楽して試験を受けて単位を取ろうという態度が見え見えの学生がいて、苦笑してしまうのであるが。溝上の言うように、そのような学生は、大学の授業に対して、自分の生活の中における意味を単位以外には見出し得ないのである。

A君の最終レポートより

「大学生の堕落」とヒトが言う時、それは大学生はあんまり勉強せえへんということを意味しているのだと思うのですが、僕はいつも「じゃあ、大学でギリギリ目イッパイ勉強した後でオマエらはアメダマでもくれんのか?」とか思っちゃいます。

溝上は、「大学生ダメ論」の起源を1960年代から戦後までさかのぼっている(溝上、2002、p.4)が、この学生はダメであることを当然であるかのように主張している。高校までの勉強でやりたくない勉強をして、大学合格というアメダマを手にした。また、大学でも同じようにやりたくない勉強をしろというなら、次はどんなアメダマを出してくれるというのか。そんな気持ちなのだろう。このコメントを読む、大学教員は怒るだろうし、とうにあきらめていると感じているかもしれないが、学生においては共感を持って受け取られるだろう。

もともと大学受験以前においても、勉強とは、授業とは、アメダマあつての苦行だったのである。よって、マゾではないかぎり、最低の労力で、効率よく結果を得たいというスタイルは、受験からの延長であり、何も目新しいものではない。最低の労力で、志望校合格という結果を得たい、そのために効率よく勉強したい、合格に関わる知識を効率よく最低の労力で得たいというスタイルを取るのが最も合格には有利である。合格を果たし大学に入学後も、そのスタイルは続いているのだろう。つまり、単位という目的のために、最低の労力で効率よく得たいのであろう。高校までの勉強は大学に入るための勉強で、大学に入ってから本当の勉強が始まると、考える学生は少数だろう。本当の勉強が始まる前に、苦行のための勉強に辟易し、嫌気がさしてしまっているのである。高い動機付けがあり意欲がある対象については、受け身で知識を受ける授業も、熱心に聞くことができるだろうが、知識を受け取るだけの授業は学生自身にその意義や必要性を実感できないと、小学校から高校までで、もううんざり、というのが学生の本音ではないか。

A君の最終レポートより

僕の幸福論は、いつもボロクソに言われるのですが、「お金と時間がたくさんあること。」ソレが目的であれ手段であれ、シアワセにつながるものだと考えています。だからもうちょっと勉強とお金の関係がハッキリ分かったらそのときは本気を出したいと思います。

彼が勉強の代価としてのアメダマはお金であろうが、直接勉強の結果としてお金が儲かるわけではなく、おそらく永遠に彼が本気を出すことはないであろう。直接お金を得る活動は、勉強ではなく、仕事である。学ぶことの意味が、仕事をするという意味と混同され、学ぶことが手段化され、学びという人類の文化の産物を味わい、継承し、創造するという意味は、失われている現状がある。

高校までの勉強の中で、誰しもが一度は「なぜ勉強しないといけないのか?」と問うたことがあるだろう。この問いに、すっきりと、「受験のため」という答えを出してしまうと、大学に入ってから勉強もまた、何か外的なアメダマのためになってしまうだろう。つまり、高校までの勉強の中で、勉強にまつわる問いに対して、この勉強が受験のためだけなのか、何かに役立つのか、何かに役立つ以外に意味があるのか、という葛藤をもち、それが大学においても持ち続けることから、学生自身における、勉強、学ぶことについての意味づけのし直しが行われるといえる。このような意味づけのし直しこそ、学生における自己理解の一環であると考えられる。

さらに、自己理解においては、当然、学ぶことの意味を考え、大学に行くことの意味を考え、さらには、子どもから大人になることの意味を考え、大きくは生きることの意味を考え、自分とは何かを考えることが、生じてくる。意

味を問うとは、その対象を納得して理解したい、受け入れたい、もしくは自分から距離を置きたいという動機だろう。そして、目的、利益、役割、メリット、得られるもの、失うもの、を知り、自分とその対象との関係を考え選択するためと考えられる。

学生が大学という場において、直面している問題を扱うことによって、学生は、その授業に参加することの意味を見出せるだろう。それは、それで、何になるかというと、自分が自分のことを考え、自分の生活を振り返るためになる。そして、自己理解とは、これらの自分にとっての意味を明らかにすることであるといえる。このように学生自身が自分にとっての、学ぶこと、大学へ行くこと、大人になること、生きること、自分とは何か等々の意味を問い、考えることは、教える側が知識として一斉授業のような形態で伝達すれば可能だろうか。自分にとっての意味を問うこと、自分とは何かを考えることは、一斉授業のような形態で行うことには無理がある。授業で触発されることはあるだろうが、その後で自分で受け取り直し、考え直す、時間が必要である。生活の中で生き、体験し、そして振り返り、立ち止まりその体験から自分は何を得るかを考えることである。そのためには、自分が語り、他者の語りを聞き、また答えるという場が必要である。つまり、自己理解が生じる授業とは、この「大学生の心理学」で行われたような参加する授業であるといえる。

2. 「やりたいこと」をめぐる葛藤と居場所とのダイナミズム

この「大学生の心理学」実践授業の最終レポートにおいて、「やりたいこと」という記述に注目する。今大学生という立場において、大学時代をいかに過ごすかについて、学生自身が、自分のやりたいことは何か、という表現で問うているといえる。そして、大学時代とは、Erikson の言う心理社会的猶予期間の最後の時期である (Erikson, 1959)。大学時代を最後に、学生は社会へと出ていかなければならない。そして、大学時代とは社会に出るための準備の期間として位置づけられる。社会に出て何をするか、そのために大学時代においていかなる準備をするかについて、また、大学時代という最後の心理社会的猶予期間において、その時期にできないこととして何をするかについて学生の記述から、その葛藤の姿を明らかにしていきたい。

(1) 大学に開放感を求める学生

Bさんの最終レポートより

私が大学生生活に満足していないのは、自分のやりたいことができていないからかもしれない。では、なぜやりたいことができないのか？ そもそも私は大学で何がしたいのか？ 何のために大学へ来たのか？

では、私にとって大学とは何か？ これは私が何のために大学へ来たのか？ という問いに通じる。私は心理学を勉強したくて大学に来たのだと思っていた。でも本当にそうだろうか？ なぜなら私は「心理学が勉強したいから大学へ行く」と考えたわけでもなく、「私は大学へ行く。じゃあ心理学がしたい。」と考えた。つまり、「大学へ行く」というのは世間一般の流れに乗ったままで、心理学は後から考えた動機に過ぎないのだ。実際、私は大学にはもっと他の点で期待していた。今まではお金がなくてできなかったことが、大学生になればバイトをしてお金を稼ぐことができ、好きなことに使える。なおかつ社会人にはなかなかできないであろうと思われること、例えば平日にどこかに出かけたりといった、大学生だからこそできることをしたいと考えていた。

後から考えたにしろ、心理学を勉強したいという気持ちは本当だ。それが一番やりたいことなら不満はないだろう。でもそうでなければ大学にいる意味がないとは思えない。やはり、高校生や社会人にはない、解放感が大学にはある。自由がある。それを味わうだけでも大学にいる意味があると思う。そして私はやりたいことをやるだけだ。それは勉強もその他のことも全部だ。今まではどちらかを選ぼうとして選べずにいたために何もできなかったんだと思う。家庭教師のバイトは難しいし時間がとられるけど、子どもとふれあうのは楽しい。通学時にはウォークマンでいろんな音楽を聴こう。興味のない授業は本でも読もう。レポートも試験もいい点さえ取れば単位は取れる。大学生活を満足するためには、不満をたれる前にこっちが自由を利用するしかない。

この学生は、大学生生活に満足・不満を感じる理由を、自分のやりたいことができているかどうかにおく。そして、やりたいことであった心理学の勉強は後から考えた動機だと正直に認める。さらに、結局は、これまでの高校生、またこれからの社会人にはない、解放感を味わうことが、やりたいことだと認める。大学に開放感を求めるという点からみると溝上の示す進学動機の分類からすると、大学とは「青春を楽しむ、課外活動にはげむ」(溝上、2002、p. 3) ために入学したという、「青春型」(溝上、2002、p. 3) に相当するといえる。

この学生は、このように、高校時代との対比の中で、圧迫された高校時代に対して、解放された大学時代を設定し、やらなければならない受験勉強に対して、やりたいことができる大学という見方をした。そして、大学時代をいかに過ごすかということについては、「私はやりたいことをやるだけだ。それは勉強もその他のことも全部だ。今まではどちらかを選ぼうとして選べずにいたために何もできなかったんだと思う。」と述べている。圧迫された高校時代から、まず自分のやりたいことという興味、関心の発するところを、基準にして行こうという見方であると考えられる。そして、やらなければならない授業も、興味がなければ本を読み、自分のやりたいことができる時間に変えようというのである。言ってみれば、やらなければならないことで生きてきた高校時代は行動、活動の基準が自分の外にあった。解放感のある大学時代は、活動の基準を自分に置くこと、自分の興味関心という欲求に置くこと、つまり、やりたいことに置くことという転換が生じたといえる。やりたいこと、という基準は、独我論的ではあるが、判断の基準が他者であった時代から、判断の基準を自分に取り戻すと意味では意義があることであるといえる。

さらに、大学においてやりたいこととは解放感を味わうことである、ということから推測すると、よほど圧迫感のある高校生活をおくってきたのだといえる。このような、圧迫感のあった高校生活と、解放感のある大学生生活の対比を、居場所という言葉(小沢、2000)を使って考えてみる。居場所とは、本人が生活中で、自分が「居る」「場所」であり、本人の生活の中で、重要なものとして、自分自身で意味構成した産物であると考えられる(小沢、2000)。この学生は、圧迫感のある高校という居場所から、開放感のある大学という居場所へ、自分の居場所を移してきたといえる。このように、過去のこれまでの居場所とは、逆の居場所を求める傾向があると考えられる。これまでの居場所ので得られなかったものを、次の居場所では求めるのである。このように、これまでの居場所を今の居場所において補っているという点から、居場所の「相補性」と名付けられる。

本人においては、このレポートに関する限り葛藤はなく、一応の結論であり、解決している様子である。何も問題がないのかというと、そうは言えない。この学生が1年生であることも考えてみると、別に全く非難するわけではないが、あまりに圧迫感のある高校生活を過ごすようになってしまうのかという思いが生じる。しかし、このままでもいいだろうかと、さらに考えると、何が足りないのだろうか。言い方を変え、この学生が、この次に立ち向かうことになる予想される葛藤とは何であろうかを、次の学生のレポートから読み取る。

(2) 「今の生活に満足している自分に対する不安」をもつ学生

C君の最終レポートより

今の自分は、大学生活というものの自由さに満足しており、サークル活動に非常に意欲を持っており、自分の居場所となっている。そのサークルは自閉症などの障害を持った子どもと遊ぶボランティアサークルで、自分の興味・関心や、漠然と描いている将来像に近いものがある。ちなみに、将来は漠然と心理学の分野で働いていきたいと考えているが、具体的に何をしたいというビジョンはない。このように、将来像をはっきりと描いているわけではないが、将来に対して不安を感じることもなく、ある程度満足した生活をおくっているというのが現状である。

自分自身について考えてみても、心理学をやりたいという漠然とした目標はあってもその目標というのは本やテレビなどを通して得た情報を基に立てたものであり、そこにはリアルな経験を伴っていない。そのためにその目標というのが切実さを伴って自分に体感的に得られないのである。そして将来に対して漠然としたイメージしか持たず、将来に対してあまり不安などを感じなかったのである。つまり、将来と向き合っていなかったために、不安を感じていなかったのであり、今の生活だけを見つめて満足した気になっていたのだ。

.....

この学生は、第2回目(10月9日)において、授業者の溝上によって行われた講義、「戦後の大学生論」を聞いた。そこで、示された講義の補助資料に触発されて、自分を振り返ったと述べている。学生は次のように書いている、「この資料によると、現在は、様々なメディアを通じて情報が洪水のように流され、バーチャルな世界と化しており、そのため、われわれはなかなか現実感を得られない。そのために将来の見通しにも現実感が得られない学生というのが増えているというのだ。このような学生は将来に対して切実感をもてないために将来の見通しを持っていたとしてもそれを実行できないことが多い。」そして、このことが自分自身についても、漠然とした目標はあっても、それについて現実感がないことを自覚していった。

今の生活に満足しているというこの学生が、「あえて自分を見つめ直す中で、捉えたことが、今の自分に満足している自分に対する不安」であったという。そして、心理学をやりたいと目標はあっても、「リアルな経験を伴っていない。」と正直に述べているように、心理学をやりたいということが、まず、現実の中で居場所において、実際に行われていないことである。つまり、実際に心理学の勉強をしてみても、何を感じたか、その心理学についていかに洞察が深まったか、ということはない。ただ、将来の夢として、やりたいことを言葉として語っていただけである。現実の居場所において、実感を持ってやりたいことについて語れることがない。つまり、学生が持つ将来の目標についての現実感のなさ、居場所という見方をすると、そして、そのやりたいことという将来の目標が、将来の居場所、つまり、期限のある大学という居場所、学生という居場所のあと自分はどうするか、社会の中で何処に自分の居場所を得るかということに、つながっていないと感じているといえる。

たとえば、先に挙げたBさんの最終レポートにおいても、「やりたいこと」はあげられていた。心理学の勉強、家庭教師、音楽を聴く、本を読む等、それらが実際の居場所において実感として何を本人に伝えるのだろうか。本人は、何をそのやりたいことを実際に居場所でやってみたときに感じるのだろうか。さきのレポートではスペースの関係で乗せられなかったかもしれない。しかし、解放感のある大学生活といえども、やらなければならない勉強やバイトや通学において、少しでもやりたいことを感じる苦肉の策でしかないのではないか。それが心からわき上がってくるやりたいことだろうか。そう本人にとって感じら得るだろうか。そう感じられるには、実際の居場所での実感と、その対象に対する洞察の深まりがあるだろう。つまり、「心理学をやりたいという気持ちは本当だ。」という気持ちを、実際の居場所において確かめること、実感を持って確かめることはあるかということである。

そして、将来の居場所へのつながりがあるだろう。やりたいことをある居場所でやってみても将来の居場所にはつながらない場合もあるだろうが、しかし、その場合は、他に将来の居場所へつながるものを探さなければならない。将来の居場所につなげるやりたいことを見つけようと思うには、最後の、心理社会的猶予期間の出口、近くにいかないとならないのかもしれない。

やりたいことは、現実の居場所における実感に裏打ちされないと、ただの現状から遊離した、他者から聞かれたときに答えるためだけの言葉となり、将来の居場所につながるものでないと、またさらに別のものを探さなければならない。では、現実の居場所の実感があり、将来の居場所につながる、やりたいことが見つければ、それで安泰なのか、を次に考えていきたい。

(3) 親の期待との葛藤をもつ学生と現実への見通しという葛藤について

ここでは、まず、Marcia(1966)によるアイデンティティ地位について、述べる。アイデンティティとは、青年期のアイデンティティ危機に対する対処の仕方であり、4つの地位に分類される。それが、アイデンティティ達成地位、アイデンティティ拡散地位、モラトリアム地位(意志決定期間)、早期完了地位(フォークロージャー)である。これらの地位は、職業、政治、宗教(無藤(1979)の日本版では価値観)の3つの領域において、コミットメントと危機の二つの基準があったかどうかで、分類される。つまり、アイデンティティ達成地位とは、過去の危機を経験し現在コミットメントがあり、いわゆるアイデンティティを達成した状態である。アイデンティティ拡散地位とは、過去の危機の有無に関わらず現在コミットメントがなく、いわゆるアイデンティティが拡散した状態である。モラトリアム地位とは、現在危機の最中であり、意志決定期間にある。最後に、早期完了地位とは、過去に危機がなく現在コミットメントがあり、いわゆる親の期待をそのまま自らのアイデンティティとしている状態である。ここで、注目されるのは、早期完了地位であり、溝上は、以下のように述べている。

「マーシャのいう早期完了型の青年は、概して批判的に捉えられる。……有名大学に多いとされるのが一般的見解である。しかし、なぜそれが批判の対象となるのだろう、と敢えて問いたい。……プロの音楽家を考えてみれば、彼らは言葉も十分に話せない頃から、親の思想を受け継いで頑張ったことを教えてくれる。また、伝統的な政治家の家柄は、暗に子供の将来をはやくから決定していることが多い。……有名大学を目指そうと音楽家の英才教育を受けようと、その課程はともに苦しい1コマの連続である。何の疑いもなく目標を目指し、達成した後無気力になる者がいるからといって、そうしてそれが批判されなければならないのか。そこまで頑張った努力はなぜ賞賛されないのか。……親の思想を必然的に受け継いで頑張ったことは問題ではない。問題にしていかなければならないのは、それが自分の中でどう意味づけられているかということである。はじめは親の価値であったものでも、やがては自分のものとなっていく。ただし、どのような形で自分のものとなっていくかには、様々な質とレベルがある。この意味づけとレベルによって、早期完了型は良くも悪くも受け取られる。そして、早期完了型の青年が大学に入ってつまずくのであれば、それはその者にとって第二の人生が始まることを示唆している。それは、悪いことではない。その場合でも、それまで頑張ってきた自分は決して消えないし、また否定されては第二の人生ははじまらない。人生は、後になってみないと何がよかったかはわからない。」(溝上、2001、p. 203-204)

Marciaによるアイデンティティ地位における早期完了地位とは、親の期待を乗り越えられなかった状態としての意味合いが込められており、自己決定し自分で選択し主体的に我が道を行くアイデンティティ像に反するものであり、発達の未熟であるという意味があるといえる。これに対して、溝上による上記の指摘は、早期完了地位は、親の期待を乗り越えることに取り組む続ける課題を持った状態であり、発達の未熟な状態ではないという指摘であるといえる。さて、このように、親の期待を乗り越えることという点に直目して、学生の記述を見ていく。

D君の最終レポートより

今、ここのありのままの自分を見つめ、受け入れようと明確に意識し始めたのは、今年の8月末のことだった。それからの自分は、自分自身から見ても、変化していったように思う。自分が一番やりたいことは何なのか、ことあるごとに自分自身に問うようにしている。それは、「明日死んでも納得いく今を生きているのか?」と自分自身に尋ねているような感覚だ。そして、一番やりたいことから、その一瞬一瞬にベストを尽くしてやっているから、「忙しい」、「時間がない」という感覚はなくなった。

例えば、現在私は4年生なので、私自身の進路のことで親とよく話をする。私は、「ホリスティック、いのち、環境というテーマのワークショップと、自然農(自然の循環に沿った農業)を続け、仕事にしたい」と言っている。しかし、親は、「せっかく大学まで行ったのに農業なんて」とか、「そんな不安定なことでどうするの!」とか、「あんたのことを考えると暗くなるよ」などと言ってくる。最近まではそのたびごとに怒りを覚えたり、ブルーになったりして、時には一人で酒を飲むということもあった。その現実を受け入れることができずに、逃避しようとしていたのだと思う。なぜ私は、そんな親に対して怒ったり、ブルーになったりしていたのだろうか?

それは、親は自分を理解してくれ、支えてくれるものだ、と無意識に思いこんでいたことに気づいた。しかし、考えてみれば、親が自分の考えを理解してくれる明確な理由など、どこにもない。生きてきた時代・環境・文化には、大きな差があるのだ。そうして、今、私は、自分の人生は自分のものだから、まず自分の気持ちを最も大切にしたいと、親への感謝の気持ちと、やっぱり親に自分を理解して欲しいという気持ちを大切に、行動に移したいと考えている。

先に見たように、将来の居場所につながる、やりたいことが明確になったからといって、葛藤がなくなるわけではない。逆に、葛藤がより現実なものとなり、切実なものになる。この学生は、自分の進路と親との意見の対立に葛藤している。ここで親を罵倒して、非難する姿勢もあるが、大人として親への感謝の気持ちを持ち、自分への理解を望んでいる。

早期完了地位は、当然ながら、親の期待があることが前提となる。まったく、親が期待していない、別の言葉で言えば、親が子どもの自主性に任している場合、早期完了地位になりたくてもなれない。逆に、親の期待があり、かつ、このD君のように、親の期待と自分の希望が対立した場合は、自分がこれからどう進んだらいいのかについて迷い、悩みという、モラトリアム地位になることもありえる。さらに、その後、再び、早期完了地位に戻ってしなう可能性、つまり、「危機後の早期完了地位」となることもあると考えられる(小沢、1991、p.207)。つまり、親の強い期待という前提のもとに育った青年は、自分の希望と親の期待の対立という葛藤に取り組みざるを得ないといえる。

(4) 「やりたいこと」の実現の見通しについての葛藤

E君の最終レポートより

ここで仮に私が司法試験を目指すとして、そのために必要なのがダブルスクールである。しかし、このダブルスクールについて考えてみると、いくつかの問題点が出てくる。まず、第一に、大量の費用と時間が必要となるのだ。費用は大体百万円近くかかるし、時間も二年間のうちに相当部分が費やされる。さらに問題となるのは、ダブルスクールをしたからといって、試験に合格できる保証はどこにも無いのだ。だから私は、「落ちてしまった場合、そこにかけた時間は無駄になってしまうのではないか?」と考えてしまう。

.....

自分のやりたいことが、果たして現実の中で実現できるのかという葛藤である。やりたいことをもてば、全てが実現できるとは限らない。願うことが全てかなうわけではないという、現実の壁がある。この葛藤は、いくら本人が自分のやりたいことだと思ったとしても、それがかなわないことはいくらでもあり、この葛藤は、自分のやりたいことという願いを持ったときには、つきまとう問題である。

大学において、将来の居場所につながらないやりたいことをすることは、大学という閉じた世界にいる間においては、葛藤が生じないものである。しかし、将来への居場所につながるものを考え始めるとそこから、葛藤は始まり、ここでみたように、現実の実現する際の壁についての葛藤にさいなまれる可能性がある。

(5) 「やりたいこと」をめぐる葛藤と居場所のダイナミズム

これまでみてきたように、学生におけるやりたいことをめぐる葛藤においては、まず、大学生活の中で現在において何に打ち込むか、何をやりたいかという葛藤があるといえる。そして、大学生活から卒業後の将来の生活へつながるものとして、社会に出て何に打ち込むか、何をやりたいかという葛藤があるといえる。つまり、大学時代にやりたいことと、社会に出てからやりたいことでは、つながりがない場合があるということである。先に見たように、全く将来への見通しなく、今が楽しく充実しているということがあり得るのである。このことは、大学生活において、自分が何をするか、何をしたいかということを考える上で、将来の生活につながるものをであるかどうか重要であり、それは、期限が区切られている、心理社会的猶予期間である大学生活における学生にとっての重要なテーマであるといえる。

さらに、将来の生活について自分の打ち込むものが明確になったとしても、ここでみたように、親との期待との対立という葛藤、加えて、現実の中での実現の見通しという葛藤にさいなまれることがある。つまり、自分の大学生活においてやりたいことは何かという中心的な葛藤があると考えられる。そして、その葛藤をめぐって、将来の居場所

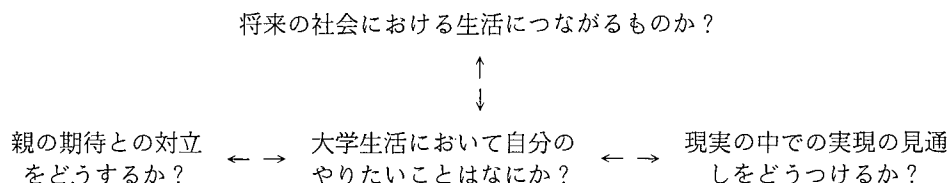


図1. 学生における、自分のやりたいことをめぐる葛藤

につながるものかという葛藤、親の期待と自分の希望との対立という葛藤、将来の実現の見通しについての葛藤があるといえる。このことを図式化すると、図1のようになる。

さらに、これらの葛藤は、学生が心の中で思っているもの、心の中でもっているだけのものではなく、常に、現実の生活における居場所と関連していくものである。この「大学生の心理学」実践授業における最終レポートからは、明示した形で葛藤と居場所の関連を示すことはできなかった。しかし、葛藤と居場所との関連を考えることは、今後の研究につながるものといえる。そこで以下に、葛藤と居場所との関連を考えてみる。たとえば、溝上のポジション理論においては、各ポジション同士の結合が重要であり、「結合が意味を作る」と指摘している(溝上、2001、p.58)。生活全体の中にはいろんなポジションがある。その関連に言及することは、生活全体を想定してしかも、変化を想定し、ダイナミズムを想定しているといえる。そのポジション同士の関係であるが、筆者の言い方をすれば居場所があるのであるが、その居場所同士は、同じ価値や意味を持つ居場所間の「類似性」の関係と、全く異なる価値や意味を持つ居場所間の「相補性」関係があると考えられる。

ここでみた、学生のやりたいことをめぐる葛藤は、その本人のもついくつかの居場所において、ひとつのゲシュタルト、居場所群のまとまりをもつということである。そこでは、それぞれの居場所が先に溝上が示した、各ポジション同士の結合に相当する、居場所間の類似性や相補性の関係を示すと考えられる。

この節では、学生の言う「やりたいこと」に着目して、やりたいことを見つけることは一つの到達地点ではあるが、完成されたものではなく、逆にそれを持ってからこそ葛藤にさいなまれるダイナミズムがあることを示した。特に、本当にそれでいいのかという問い直しと共に、具体的な居場所における確かめや実感の必要であり、親の期待との葛藤も生じる可能性もあることを示した。

やりたいこと、言い換えると、自らが打ち込む対象について、現実の生活の中において、つまり、居場所において実感を持ってそれがいかなるものかの感じられるダイナミズム、つまり、問いと答えの対応関係が生じるか、ただ心の中で思っているだけで、現実の生活の居場所においては何もなしえず実感も得られず、自分はこれをやりたいという思いが現実の生活ではすり抜けてしまうというダイナミズムであるかの違いが大きくあるといえる。

さらに、現実への見通しや親との葛藤という現実の中で生じてくる問題についても、そこで得られた実感を通して、これでいいのだろうか、どうしたらいいのだろうか、という葛藤が続きまとい続ける。つまり、やりたいことがない葛藤に対して、やりたいことがあっても別の意味での葛藤が続くということである。そして、その葛藤に伴い、生活の中での様々な居場所を得ていくと考えられる。

3. アイデンティティとその見方

(1) アイデンティティは必要か、不要か

F君の最終レポートより

日常生活で今までアイデンティティについて考えたことは無く、考えなくて無いからといって何の問題も無いという意見があった。アイデンティティの確立は必要だと思う。確立されていない場合、人間として生きる意味、つまり自分の存在意味が明確でなく、自分のしていることの意味がつかめず、何をしているのか分からず、不安を抱くことになってしまうからだ。……いま現在、アイデンティティがなくてもよいとされる時期にいたとしても、いずれは社会の中にはいっていく、そうなった時に自己のアイデンティティを確立しきれずに不安を抱いたままで、健康的な生活が送れるだろうか。僕は送れるとは思わない。だからこそ、アイデンティティの確立は重要なのである。

.....

これに対して、アイデンティティは不要だと述べる学生のレポートを示す。

G君の最終レポート

この授業におけるディスカッションでも、それぞれの人によるアイデンティティに対する捉え方には、違いが

はっきりとみられた。それでは私自身がどのようにアイデンティティを捉えているかという、いろいろ考えた末、アイデンティティとは「自分自身がいったい何者であり、どのような価値・意味をもつ存在であるかの認識」であると捉えていままで議論してきたという結論に達した。しかし、アイデンティティについて考えれば考えるほどこのようなことを考えることに意味があるのわからなくなってきた。

現代社会において、ここ最近よくアイデンティティや精神的なものに関連した諸問題が浮上してきている。これはアイデンティティという言葉が社会に広まったせいなのではないか？ アイデンティティという言葉概念化することによってアイデンティティという言葉が一人歩きをして、悪影響を及ぼしているように思われてならない。

私たちの多くは、普段アイデンティティなどというものはあまり意識して暮らしてはいない。時には意識することがあるかもしれないが、けっして意識しなければならないものではないはずである。しかし、アイデンティティというものが概念化され、偉い学者によってむやみに連呼されることで、考えなければならないものになってしまい、圧迫されるような人々も出てきたのではないか。その現れが先に述べた諸問題として表面化しているのだろう。このようにアイデンティティを概念化することで、逆に悪影響を及ぼすような方向に向いてしまうのならば、アイデンティティなんてものは考えなくて良いと思う。考えるな、とは言わない。アイデンティティという言葉概念化せずに、ただ自己のことを考えたい人はそれぞれで考えればいい。決して考えなければならないものではないのだから。そういう意味で、アイデンティティは不要である。

F君は、アイデンティティを明確に定義しているわけではないが、その文意から探っていくと、アイデンティティとは、人間として生きる意味、自分の存在意味、自分のしていることの意味を示すものであるとしている。そして、アイデンティティを必要な理由として、社会の中で健康な生活をおくる上で必要なものだからと捉えているといえる。

D君は、アイデンティティとは「自分自身がいったい何者であり、どのような価値・意味をもつ存在であるかの認識」であると捉えている。そして、アイデンティティとは決して意識されなければならないことではなく、逆に学者が広めて意識させることによって悪影響を及ぼすという。そして、「アイデンティティという言葉概念化せずに、ただ自己のことを考えたい人はそれぞれで考えればいい。」と述べ、アイデンティティは不要という。

必要であれ、不要であれ、これらの学生のコメントにあったように、アイデンティティとは、生きる意味や自分という存在や自分の持つ価値に関するものであることは確かだろう。しかし、アイデンティティという概念はつかみづらいし、定義しにくい。このアイデンティティ概念の捉え難さについて、西平は、アイデンティティ概念が持つ特徴として、「統一性・包括性・全体性」(西平、1978、p.166)をあげている。この指摘は、アイデンティティという概念が、一面的に、単純に、定義することが難しいことを示している。さらに、また、溝上は、Eriksonのいう、「自我アイデンティティの感覚」を「青年期における自我の確立のために必要な3つのキーワード、『自我』、『アイデンティティ』、そして、『私』の存在の『感覚』が無秩序に合わさったものである」と述べている(溝上、2002、p.18)。

まず、この複雑に絡まったアイデンティティという概念を紐解いて、捉え直す必要がある。

(2) アイデンティティとは

まず、西平直は、「アイデンティティとは、プロセスであり、運動であって、それはいってみれば、古い自分を保持し一貫すること、より新しい自分へと再生していくこととのズレによって、またそのズレを産み出しながらバランスを取っていかうとする運動として理解されてくる。」(西平直、1993、p.215)と述べている。つまり、ズレがあるから、アイデンティティが問題になると摘している。これは、アイデンティティを、固定的な、固体物とは、捉えなない、ダイナミズムの視点をもって捉えたアイデンティティをみる見方である。

また、溝上は、哲学の流れの中で、Erikson以前にずっと前から議論されてきたアイデンティティについて考察している。このような考察は、これまでのエリクソンによるアイデンティティ研究者においてはなされてこなかった。そこで、溝上は、アイデンティティをもつとは、「同一と差異の中で生じる同定確認行為である」(溝上、2002、p.21)と述べている。

では、何と何の同一であり、差異か。ズレか。つまり、何かと何かがイコールであることがアイデンティティならば、人間における、アイデンティティとは何と何が同じであるかどうかというズレが問題になっているのであろうか。

Erikson の指摘する、アイデンティティの感覚とは、簡単に言うと自らの「斉一性と連続性 (sameness and continuity)」についての自他承認の感覚と述べている (Erikson, 1959、小此木訳、p. 10)。では、アイデンティティを持ったときの感覚は、アイデンティティについての自他承認ということはわかったが、では、アイデンティティ自体は何なのか、斉一性と連続性 (sameness and continuity) とは何なのか。という問題となる。

Erikson の言い方をすれば、斉一性と連続性 (sameness and continuity) はまさに、時間的に又空間的に、自分と自分がイコールであることであるか、である。ここで、何と何をどう想定するかによって、アイデンティティ観、アイデンティティについてどのような視点で捉えるかが異なってくるといえる。

発達の視点を持てば、子どもの頃家庭や学校にいた自分と、大人として社会の中で生きていく自分とのズレであるし、クロスカルチャラルな視点を持てば、ある文化で育った自分と、別の文化の中で生きていく自分とのズレであろう。

さて、筆者は何と何をおくかといえ、山中恒著の児童小説の「ぼくがぼくであること」(山中、1975) のタイトルからヒントを得て、アイデンティティとは、「ぼくがぼくであること」、「自分が自分であること」、「私が私であること」(私=私) と捉えている。そして、アイデンティティ危機やアイデンティティ拡散とは、「私が私でない」(私≠私)、「私はいったい誰か? 何者か?」(私=?) という葛藤を持つことであると捉える (小沢、1998、p. 23)。つまり、主観的視点を持って、主観である自分と、こうして社会の中で生きている自分をおいている。この社会の中で生きている自分は、発達的な変化を受けたり、様々な他者の評価にさらされ、違和感というズレを感じることがあり、様々なズレの生じる領域があり、それがアイデンティティ危機の問題が生じる領域となり、様々なアイデンティティ研究の領域ともなる。発達のアイデンティティ、人種的アイデンティティ、民族的アイデンティティ、国家的アイデンティティ、性的アイデンティティ、職業的アイデンティティ等々となる。生涯にわたって生きていく中で、さらに、この流動化している現代社会の中では、変化にさらされるのは仕方ないといえる。そこでは、社会の中で生きている自分が様々な変化にさらされ、主観である自分との間に、西平直のいうズレ、溝上のいう差異、言い換えると違和感が生じる可能性がある。

(3) アイデンティティにおける実存的側面

さらに、「自分が自分であること」というアイデンティティの捉え方を、主観的な視点にたつと、アイデンティティとは、主観である私が、ここでもうこうして生きている私であることとなる。では、これに社会的視点を加えると、エリクソンのいう心理社会的視点に相当するといえるが、そうすると、アイデンティティとは、主観である私が、この社会に様々な他者の中でこうして生きている私であることとなる。さらに、実存的視点を加えると、主観である私が、この時代にこの社会に様々な他者の中でしかもたったひとりの人間として生きている私であることとなる。このような、実存的視点で捉えたアイデンティティのことを、実存的アイデンティティとよぶことができるが、この実存的アイデンティティにおいては、「宿命」にまで行き着く。アイデンティティとは、突き詰めて考えれば、実存的視点を取りうることができ、自分が自分であることの宿命、この自分がこの時代にこの社会にこの地域に生まれ子の親のもとに育ち様々な資質、容姿や才能興味関心等々を様々な宿命を持っている。日本語にある縁という言葉を使えば、「私がこの私として生まれ生きている縁」である (小沢、1998、p. 23)。

このようなアイデンティティの側面について、Erikson をはじめとしてアイデンティティを語る研究者は、この宿命の領域に言及している。例えば、小此木は、Erikson のアイデンティティの指摘は受動的に受け取ったものをいかに主体的なものに転換するかの大切さを述べたものであるとし次のように述べている。「男性、女性としての生物学的な自分をはじめ、この親、この家庭、この階級、この地方に生まれた自分といった運命的なものすべてを、自らのアイデンティティとしていかに受容し、価値あるものたらしめるか、自ら選んだ主体的なものに転換することができるか。エリクソンが私たち一人一人に問うのは、まさにこの課題である。」(小此木、1978、p. 95) また、西平も、神谷美恵子のハンセン氏病患者への問いかけである「なぜわたしではなく彼らであったのか?」を背景に、彼女の伝記分析を行っている (西平、1999)。さらに、述べると、西平直は、誕生から死までに一人の人間に生涯を置き、

あとは世代間の問題として受け継がれていくものとしてエリクソンが設定したアイデンティティの範囲を、簡単に乗り越えてしまっている。そして、「シュタイナーから見れば、エリクソンは、ずいぶん無理をしたものである。アイデンティティの根拠を切り捨ててしまった地平にアイデンティティを求め、サイクルの持つ時間的な広がり拒否した地平にライフサイクルを求めている。」(西平直、1998、p.165)と述べている。筆者は、この世に限定してアイデンティティを語り、捉えようと試みているが、アイデンティティとはこのような向こうの世界にまで行ってしまうような可能性、危険性を秘めている概念であることを示しておきたい。

(4) なにがアイデンティティの必要か不要かの分かれ道か

このように見てきたように、アイデンティティとは、自分が自分であることの違和感があって初めて問題になるものである。言い換えると、自分とは何か？ 自分はこれでいいのか？ という自分への問いが生じることによって、人は自分のアイデンティティについて考えなければならなくなる。つまり、内省的に自分を振り返るという視点をもってこそ、生じるものである。よって、この視点が生じた者、もった者にとっては、アイデンティティは、取り組むべき考えなければならないものとなる。しかしこの視点を取らなくても、生活上支障はない状況においては、当然、アイデンティティとは不要である。学生のレポートに見るように、アイデンティティを考えることが、必要な学生もいるし、必要ではないという学生がいるのは、当然であり、アイデンティティとは、すべての状況、すべての学生、もっと言えば、すべての青年、すべての人間において、必要なものではない。ここで見たように、自分を内省的に振り返るという視点をもつ状況において、必要となる概念である。

いかなる概念においてもそうであろうが、特にアイデンティティという概念は、誤解を招きやすい概念であり、いかなる人間、いかなる状況においても適用できる概念であると思われてしまうがちである。しかし、アイデンティティは、状況限定的に使用されるべき概念であるといえる。さらに、アイデンティティが用いられる、限定的状況をより明確にすることが、より明確なアイデンティティ理解につながると考えられる。

4. 学生の最終レポートからこの自己理解の実践授業である「大学生の心理学」を居場所とアイデンティティから捉える

ここでは、特徴的な2名の学生のレポートと終了後の面接結果から、この授業がそれぞれの学生の居場所となりえたかどうか、そしてそれぞれの学生はアイデンティティがもちえたかどうか、について考えていく。記述の仕方としては、一人が居場所もアイデンティティも持ち得ることができず、もう一人が居場所もアイデンティティ得たと、対比して述べていく。これは、論点を明確にしたいがためであり、前者を悪玉、後者を善玉としたいからではない。特に前者の学生のレポートは、内容ではいずれも他の学生とは大きく異なり、生活の中での経験も他の学生に比してみると飛び抜けていた。そのために、このように題材として提示することができたことをはじめに記しておく。

(1) 「プロテウス」として生きる

H君の最終レポートより

最近どうしている？ 大学生活で最もポピュラーな会話の切りだしかたである。じゃあそれぞれ自己紹介をしてください、これもまたよく耳にする言葉である。昔私はこれがとても得意だった。人前で話すことに気恥ずかしさを感じる人種ではなかったし、話す話題にも事欠くことはなかった。あとは相手を見て適当に出したり引っ込めたりしていれば、相手は安心して満足したり感心したりしてくれる。

しかし現在の私はこれらの会話が全くもって苦手である。なぜだろう？ それは昔と違って自分が語ることに自信がもてないからである。自信、といってもその内容(時間の使い方や自分がどういう人間か)そのものに関する自信ではない。それをその場で(簡単に)語ってしまうことについて、迷いがあるのである。

.....

この学生は、話すことが得意であったときも、他者と意見を本当の意味では聞いていない。そして、相手の満足を

安心を引き出すことが目的の会話をしており、他者と本当の意味で意見交換をしようとは思っていないといえる。そして、現在は苦手だというのが、もともと形式的にやっていたことに、疑いを持つようになったのである。つまり、以前やっていたサービスをしなくなったのである。人前で話すことが平気であったときも、自分が語ることに自信がもてなくなってからも、他者と思っていることを言い合おう、自分のことも話そう、相手のこと聴こうという気はない。つまり、他者との対話をめざすこと、他者との対話によって、自分の見方を変えようとするのをめざすことは、なかったと考えられる。ある意味、居場所を共有する他者との交流の限定であり、拒絶である。このため当然、この授業を自分の生き生きとできる居場所とは、当然認め得ないだろう。

彼は、次のように物足りなさを語る。

H君の授業終了後の面接より

やっぱり、みんな1回生の子が多くて、僕は3回生で、年齢的にも外国に行っていたりして違うので。こないだも、半年前まで高校生だったという子が多いので、ちょっとコミュニケーションのやり方というか……。例えば普通の場合やったら話さない人達と、無理矢理その場の中で、この話から何かを学ぼうと思って話すわけですから、無理矢理こじつけ的に何かを感じることはできたと思います。これ(リフレクションシート)もこじつけ的に何かを感じたことを書いてるわけですね、要するに。(見方や考え方が揺さぶられるようなことは……。)なかったですね。最後までこれ(リフレクションシート)を書いている時は、後ろめたいじゃないですけど、滑稽な気持ちはしていました。嘘ではないですけど、普段、何もないニュートラルな環境で、出会っておーと思うような人や考えではないですから。まあ、ちょっと教育ですから。でも、それを求めて来てるわけやから、そういう意味では全然いいと思うんですけど。でも、もっといいコミュニケーションっていうのは、教育の枠内でも可能だろうなと思いますけど。それは運もあると思いますし。そういう意味で、不満というのではないです。

.....

ある意味、相手に恵まれないかもしれない。自分の殻に閉じこもっているだけかもしれない。筆者の目から見ると、とても有効であり、他の学生のコメントからしても有効なコミュニケーションの手段である、リフレクションシートにいつも簡単に、こじつけを書き、滑稽と感じていたとは。

彼は、他者の話を聞き、自分の意見を言うということをこの授業では、していない。形式的な押し出しをやめて、殻にこもっているようだ。確かに彼の経験に相当する学生はいないようにもみえる。つまり、彼には、彼にふさわしい話し相手がいなくて彼には思える。そんな彼がやっと最終回に巡り会えた話せる相手がいた。

H君の授業終了後の面接より

(接してみて、もっとも自分の見方や考え方が強く揺さぶられた人は?)「一番最後(12/18)のK君っていうちょっと変わった子です。……大学っていうのは、……一応ことばを使って、物事を話したりコミュニケーションするという暗黙の前提みたいなのがあって成り立ってる場だと思うんですけど、彼はそういう場に属せないという、大阪のちょっとやんちゃな所で育ったみたいな感じの子なんですけど、彼はとても頭もいいと思うし、すごくいろいろ考えてるんだろうなと思うんですよ。けど、あくまでもコミュニケーションスタイルというか、自分のあり方っていうのは、大学に妥協せずに、大学的なものに。……彼はそれをそのまま大学のカルチャーに妥協じゃないけど、同化することなくっていうところがあって、それを見たのは、それがいいか悪いとか、彼が大人であるか大人でないとかいうことは別として、痛快な感じがしました。大学で見かけるタイプの人ではないので。彼みたいな人間見ると、カルチャーの秩序は乱されますけど、とても気持ちは良かったです。(K君と接したのはこれが初めて?)最後が初めてです。

.....

せっかく巡り会えた話せる相手なのにそれが最後の授業とは、H君が言うように、運が悪いのだろうか。このように、いかなる相手とこの授業において、会話できるかということは、偶然の産物でもある。自分と対等に話せる相手

が見つからなかったといっても、上級生に時に見られるであろう、下級生の話題を乗せ、聞き上手になり、さらに、自分の本音も相手にわかるように話し、多少の教育的効果を行う役割を彼は演じはしなかった。溝上が指摘した、上級生の効果は彼にはまさに逆効果というべきものであったといえる。この点で彼を非難することはできない。彼も参加者の一人であるからである。この点から考えると、このような授業において、教育的効果を果たす役割の上級生をあえてグループディスカッションの補助者として、配置するという案も考えられる。

H君の最終レポートより

皆が時間の流れとともに何らかのアイデンティティを模索し自己をそこに構築していこうとする時期に、私はアイデンティティといったものから自由になりたいと考えることがある。この無限の世界において自分をどこかに繋ぎとめ、守り、そして現実にはこれから自分を養っていく手段ともなる自らのアイデンティティを持ってしまふことに、躊躇いを感じているのである。

ただアイデンティティというこの不思議な言葉がこれほどにも広く使われていることもそうだが、ある何か(のキーワード?)によって自己を認識し、導き、あるいは語るというフィクションが、それによって効率よく回っているこの世界が、今更ながら怖くなってきたのかもしれない。現実や時間からの逃避ではなく、アイデンティティといったものに依拠することなく生きることは可能だろうか？

子ども染みていることを承知で言えば、私のやりたいことは自分のやりたいことに自分が縛られない(語られない)生き方であり、私の求めているアイデンティティとは、アイデンティティによって自分を identify することを必要としないというアイデンティティ、ということになるのだろうか？

.....

まさに、Rifton のいう「プロテウスの人間」である (Rifton, 1967)。流動化した現代においてはこのような生き方はひとつの理想的な生き方でもある。しかし、自分が自分であることというアイデンティティからは、ますます離れていってしまう。それが目的なのであり、まさに、アイデンティティとは対極の生き方である。

アイデンティティとは、実存的視点からすると、こうして生きている自分という宿命に関わるものである。よって、逃れ得ないものである。逃げるとか、自由になるとか、そんなことはできないものであるといえる。誰も自分が自分であることから、自由になれないはずであると、みるのがアイデンティティの見方である。プロテウスの人間はそれができるとする。

さらに、アイデンティティ、自分が自分であることを受け入れるには、自分が自分であることを確認するには、居場所が必要であり、そこでは、自分が打ち込む対象と交流する他者がいる。つまり、自分が自分であることにつなぎ止めるには、打ち込む対象と他者がいるのである。さらに言うと、打ち込む対象も、交流する他者もないと、自分が自分につなぎ止められないのである。

この授業で、打ち込む対象というのは、他者とのディスカッションであり、交流する他者とはその他者そのものであるが、その他者との交流をせず、機会に恵まれずにいる状態では、当然、アイデンティティはつかみえず、アイデンティティからは自由になり得る。それで、プロテウスになれる。Rifton が指摘するように、プロテウスになるには、それだけの力量が必要である。次々と変わっていく状況に対応できるだけのものがなくては、プロテウスにならない。彼にはそれが充分あると推測される。

最後に、アイデンティティを背景にした理論で述べられないのが残念であるが付け加えておく。筆者の見方は、あくまでもアイデンティティの見方である。故に、この学生の、これまでのそしてこれからのプロテウスの彷徨が、アイデンティティへの、しかも実存的アイデンティティへのプロセスのように捉えられる。その理由は、小説の「スカラムーシュ」を連想するからである。役者、剣術家、政治家に、次々と成り代わりつつ、フランス革命の激動の中に吞まれていくスカラムーシュとあだ名の主人公。状況に応じて、器用に的確に、ある仕事に就き、それを十分にこなす。そして、時期が来ると逃げつつ、変わりゆく。その主人公はこう語る。「4年間の間、ぼくは弁護士になり、政治家になり、剣士になり、道化役者になったんだ。……しかし、ぼくが演じてきた役割で成功したものはあると思うかい？ いつも最後には逃げ出しているんだ。……今はその政治からも逃げ出すところなんだ。ほんとうにすぐれて

いるのは逃げ出すことだけだろうね。これもまたスカラムーシュの特質なんだ。」(R. サバティニ、1921、大久保訳、p. 502-503)。しかし、その過程は、激動する社会のうねりに翻弄されながらも、この自分として生まれ生きてきた宿命を受け入れることに、まさに、実存的アイデンティティを得ることにつながっていくものであった。この主人公においては、自分の父親および母親との対峙が、まさに自分のアイデンティティへの直面であった。このH君自身は、スカラムーシュに自分をみるだろうか。それとも苦笑するだろうか。

(2) 熱いコメントからアイデンティティを捉える

D君の授業終了後の面接より

(この授業を振り返って、得られたものはありますか?) 毎回、リフレクションシートに書かれているようなことを得られたなあと、その時その時思ったんですけど、全体を通して……。

今、思うのが自分の意見とか考えとか、自分の生き方っていうのは、初めのイントロダクションの時に、溝上先生が「他者」という言葉で言っていたんですけど、その関係の中で作られてるし、自分が作っているなあとというのは感じて、最後にA4のレポートを書いたんですけど、その時自分の意見を表現するときに、他の人の考えを自分の考えを表す(ための)一つの軸というか、いくつかの人の考えを考えに入れることにより、自分の考えがより立体的に見える、より上手く表現できる、僕の意見だけじゃなくて、いろんな人の意見の中で僕の考えとか、意味がでてくるだなあと考えた。そういう意味で、いろんな人とのコミュニケーションとか、いろんな人の思い、いろんな人の考え、いろんな関係の中で自分を表現しているんだなあと全体を通して、今、感じています。

話を積極的に聞こうと思った。話している人のことを理解するというか、話している人の意見をまず共感して、お互いディスカッションといっても、自分の考え、お互いの意見に触発される、学びを深くする、ただ議論だけでなく、僕自身、話を聞くと言うことを意識してやって、自分の分からなかったこと、理解できなかったことを聞き直したり、そういうことを毎週やっていたことは凄い、話を深める中で、毎週実践の場があって、そういう意味で、いいトレーニングになったと思っています。……溝上先生のコーディネートと、ただ議論だけでなく僕自身、話を聞くと言うことを意識したこと、自分の分からなかったことや理解できなかったことを聞き直したり、そういうことを毎週やっていたこと。

この学生には、授業者の溝上の設定した、リフレクションシートの意図が、充分伝わっている。彼は、溝上のいう「他者」と意見を交換しながら、自分の考えを深めていくことを実感している。彼にとってはこの授業は、他者とコミュニケーションできる、生き生きとした居場所となっただろう。

また、彼は先に見たように、「現在私は4回生なので、私自身の進路のことで親とよく話をする。私は、ホリスティック、いのち、環境というテーマのワークショップと、自然農(自然の循環に沿った農業)を続け、仕事にしたい」と述べ、将来の居場所につながる、やりたいこと、打ち込む対象をもっている。そして、親の期待との対立という葛藤ももっている。次に、彼のレポートから、アイデンティティに相当する部分をみていこう。

D君の最終レポートより

では、なぜ私はこのような今、ここ、あるがままを生きようとしているのか。一言で言うなら、これが、今の私にとっての生きる意味だからである。私にとって生きる意味とは、この一度きりのいのちを目一杯輝かせることだ。親に動かされ、他人に動かされ、組織に動かされ、単位、バイト、サークルのためにただ何となく過ごし、生きていけば、ただ唯一の私のいのちを目一杯輝かせることはできないと思う。ことあるごとに、今、ここに生きる自分があるがままの感じ、想い、考えを見つめていくこと。そしてそれを、善悪、優劣などの限定されたもののさしで切ることなく、受け入れていくことから、いのちは自由に、輝くことができると思う。このような私の想いに対して、Sさんが以下のようなコメントをくれた。

「何かに身をまかせ、流されていくことが本当に悪いことだと言えますか？全ての瞬間でベストを尽くすのは理想かもしれないけれど、何かに忙殺されてしまうこと（自分を見失うこと）もたまにはいいのでは？」

私はこのSさんの言うことは、その通りだと思う。その気持ちはよく分かる。人の生き方に、良い悪いなんてないと思っている。自分が本当に何かに流されたい、忙殺されたい、自分を見失ってもいいと思っていれば、そのような生き方をすればいいと思う。人間は限りなく自由なのだ。今ここで命を絶つことさえできる。そのような自由の中で、私は今、ここ、ありのまま自分の想いを受け入れ、このいのちを思い切り輝かせたい、楽しみたいと思っているのだ。

.....

アイデンティティを自分が自分であることと捉えたと、アイデンティティをもつとは、自分が自分であることをイコールで結ぶこと、納得して受け入れることとして捉えられる。このことは、アイデンティティの感覚を持つことと同じことである。通常は、自分が自分であることは当然のことで何の疑いを持つことではない。しかし、社会変動や、発達における青年期の諸変化にさらされると、こうして生きている自分が変わっていくことになる。よって、今までの自分とは違う、という感じを持つ。こうしている生きている自分自身をどうしたら、納得して受け入れられるかという問題に、直面させられることとなる。自分が自分であることは当然のことなのであるが、自分が自分であることに対して疑いや、拒否感をもってしてしまうことがあるのである。この学生の過剰とも思われる熱いコメントである、「私にとって生きる意味とは、この一度きりのいのちを目一杯輝かせることだ。」という表現は、その背景に、自分への疑い、つまりは自分が自分ではないと思われること、アイデンティティ危機があることを推測させる。つまり、このような熱い表現がなされるには、それなりの危機的状況があると考えられるのである。そして、「私は今、ここ、ありのまま自分の想いを受け入れ、このいのちを思い切り輝かせたい、楽しみたいと思っているのだ。」というコメントは、アイデンティティという自分が自分であることを納得して受け入れることを目指している思いであるといえる。

アイデンティティの感覚についての意識が高まるときは、他者からの承認を求めつつ、ある面で自意識過剰となっている。そこでは、自分と他者との違いについても明確に自覚されてくる。よって、この学生のコメントのように、他者はあう考えているが自分はそれと違う意見であると、自分の考えを強く自覚する。そこから、他者と対立したり、他者の意見を批判したり、いわゆる円滑な人間関係を損ないがちになりながらも、自分の考えを意識していくことにもなりかねない危険がある。このような、アイデンティティの感覚、さらに、アイデンティティ概念自体にまつわる、自己愛的な、自意識過剰的傾向への危険性については、今後さらに、明確にしていく必要があると考えられる。

(3) 大学の授業を、自分自身の居場所とアイデンティティを振り返り、他者との対話を通した、自己理解を目指す居場所とする試み

以上のことから、この「大学生の心理学」実践授業は、参加者である学生自身が自分自身の居場所とアイデンティティを振り返り、他者との対話を通した自己理解を目指す居場所となる試みであったといえる。学生自身は、それぞれの居場所をもって学生生活をおくっているであろうが、その自分の居場所とそして自分のアイデンティティを振り返る「居場所」と授業がなっていく可能性を持った試みであるといえる。当然、すべての学生にとってそうだったかと言えば、そうではないのであろうが、この授業は、そのような方向性を持ったものであったといえることができる。

我々がここは自分が生き生きできる居場所であると思うとき、その居場所には多くの場合、他者と対象がある。つまり、自分と他者との対話、交流があり、なおかつ、他者と共に打ち込む共通の対象がある。多くの大学の授業は、一斉授業でありよほどやる気がある学生でないと、生き生きできる居場所とはなりにくい。この実践授業においては、参加学生同士がグループとなり対話をする機会が与えられていた。このことが、授業が居場所となるう方向性を持っているといえる理由のひとつである。さらに、学生自身が自分でテーマを選択し、それについて考察を他の参加者の学生との対話を通して、深めていく作業は、本論で示したように、自分の今の居場所、将来の居場所を見つめ、さらには自分のアイデンティティを振り返るテーマであれば、それは自己理解への試みであるといえることができる。

また、通常の心理学に関する講義においても、自己理解を学生は心理学に期待するものである。この自分について

知りたいという気持ちにいかにかえていくかは、心理学を担当する授業者に課せられた課題の大きなものである。当然、講義であるから当然知識伝達型にならざるを得ないのであるが、この自己理解実践授業の骨子をくみ取り、参加者同士の対話及び自分自身を振り返ることが促進される状況を提供し、授業が学生の自己理解を求める居場所となる方向を試みていくことも今後の課題として考えられる。

引用文献

- Erikson, E. H. 1959 Psychological Issues: Identity and the Life Cycle. International Universities Press. Published as paperback 1980 W. W. Norton (小此木啓吾訳編 1973 自我同一性 誠信書房)
- Erikson, E. H. 1968 Identity: Youth and Crisis. W. W. Norton. (岩瀬庸理訳 1982 金沢文庫)
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego identity status. Journal of Personality and Social Psychology. 3, 551-558.
- 溝上慎一 1999 自己の基礎理論 金子書房
- 溝上慎一 2001 大学生固有の意味世界に迫るためのポジション理論 溝上慎一編 大学生の自己と生き方 ナカニシヤ出版 pp. 50-60.
- 溝上慎一 2002a アイデンティティ概念に必要な同定確認の主体行為 梶田叡一編 自己意識研究の現在 ナカニシヤ出版 pp. 1-28.
- 溝上慎一 2002b 戦後の大学生生活 溝上慎一編 大学生論 ナカニシヤ出版 pp. 1-49.
- 水間玲子 2002 学び支援プロジェクト(大学生編)「大学生の心理学」における学生の参加動機 京都大学高等教育研究第8号 75-99.
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究27. 178-187.
- 西平直喜 1978 講座・アイデンティティ 青年心理12月号 金子書房 pp. 164-183.
- 西平直喜 1999 女性の生涯発達心理・歴史的考察 岡本祐子編 女性の生涯発達とアイデンティティ 北大路書房 pp. 31-54
- 西平直 1993 エリクソンの人間学 東京大学出版
- 小此木啓吾 1978 モラトリアム人間の時代 中央公論社
- 小沢一仁 1991 青年と社会 山添正編著 現代日本人のライフサイクル プレーン出版 pp. 163-221.
- 小沢一仁 1996 自己理解のためのアイデンティティ概念の捉え直しの試み 東京工芸大学工学部研究紀要第19号 28-39.
- 小沢一仁 1997 自己理解とアイデンティティ 東京工芸大学工学部研究紀要第20号 29-39.
- 小沢一仁 1998 青年期のアイデンティティにまつわる問題の起点 東京工芸大学工学部研究紀要第21号 18-28.
- 小沢一仁 2000 自己理解・アイデンティティ・居場所 東京工芸大学工学部研究紀要第23号 94-106.
- Rifton, R. J. 1967 Boundaries-Psychological Man in Revolution. Deborah Rogers. (外林大作訳 誰が生き残るか —プロテウスの人間 誠信書房 現代のエスプリ78号アイデンティティ所収 1984 pp. 155-168.)
- Sabatini, R. 1921 Scaramouche. (大久保康雄訳 1971 スカラムーシュ 創元推理文庫)
- 山中恒 1973 ぼくがぼくであること 日本放送出版(1975 角川文庫)